
渴望の先にあるモノ

安藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渴望の先にあるモノ

【Nコード】

N2232Z

【作者名】

安藤

【あらすじ】

世界に存在する一人のイレギュラー。彼女が望むモノは、どこにあるのか。彼女が欲しい物は、一体何なのか。

夕焼けに染まる空。

関西、京都。山の上に立つ、その屋敷と言って差し支えない大きさの家の縁側に、一人の少女が座っていた。

少女の肌は白く、真っ黒な髪は肩で切り揃えられている。着物を着ており、幼い少女のその雰囲気は、どこことなく儂さを醸し出している。

小さく風が吹き、直ぐに凪ぐ。

冷えた空気が体にあたって少女は小さく震えるが、少女にとってはこれも心地良い物として認識していた。

肌で空気を感じ、自然を感じ、いつもと変わらない景色を目に焼き付ける。少女の数少ない楽しみでもある。

ふと、笑い声と共に二人の少女が現れる。一人は自身と同じ様に着物を着た少女、近衛木乃香。

もう一人は黒髪をサイドテールに纏めた、これまた着物の女の子。

どちらも小学校に上がるか上がらないかと言った位の年齢で、手には手鞠があり、どこかで遊んで来たのだろう、声は弾んで楽しさがこちらまで伝わってくるようだ。

縁側に座っていた少女は、小さく俯いた後、その声を聞くまいとするかのようにして、部屋へと歩いて戻っていく。

吐き出す息が白く染まるほどの気温の中、ずっと縁側にいた少女は、歩く度に目眩がし、段々と視界がぼやけ、体のだるさを感じつつもゆっくりゆっくり一歩ずつ歩く。

それでも、体の方が耐えられなかったのだろう。少女の体は、突然吹いた少し強い風に押される様にして倒れた。

木で出来た廊下に倒れた少女。何やら音がしたと誰かが不思議に思って廊下に出てみれば、直ぐに少女が倒れているのが目に入った。

直ぐ様駆け寄り、少女の状態を確かめた後、抱きかかえてどこかの部屋へと入っていく。

少女を連れて部屋に入った女性は、慣れた手つきで少女を寝かせ、熱を測り具合を確かめて近くに誰かいないか呼ぶ。

それに呼ばれて来た数名の女性達は、直ぐに対応して少女の治療を始める。

駆けつけた少女の父親は、苦い顔でその状態を見る。自身が何もできない事を悔やむかのよう。

少女の名は、近衛遙はるかと言った。

遥は特異だった。

体は病弱で、いつでも死人のように白い肌で、誰よりも強い。

否、強いと言うと語弊があるだろう。遥は唯の一度も戦った事など無い。だが、本能的に戦闘技術などは自分の方が上だと悟っていた。

自身の父が受け継いでいるとされる『京都神鳴流』の奥義を、唯一度見ただけで再現できるようになり、宗家青山家にだけ伝承される『斬魔剣 弑の太刀』という剣術さえ、簡単にやってのけた。

とはいえ、遥は人前でそんな事を出来るような立場では無かった。先述したように、遥は病弱だ。誰よりも弱く、誰よりも強い遥は、家から出る事さえ殆ど無かったと言っている。

外で走り回って遊ぶなど夢のまた夢。体調の良い時でさえ、精々散歩するのが関の山だ。体を使う武術などとても無い事だ。

遥自身、外で遊ぶなど無理だろうと思っていた。運動能力が低い訳では無い。唯、病弱な自身の体は普通に走り回るだけでも喘息を起こしかねない。

唯、それだけの理由。

それでも、諦めきれなかった。自身の体が普通で、外で皆と同じ

様に走り回って、同じ様に遊べたらと何度希こいねがった事か、分かりはしない。

そして、最も近くにおいて、最も知っている双子の姉は、遙の事を気にかけてはくれた物の、遙は木乃香を否定した。

しかしそれでも、羨望、嫉妬、それらのないまざった眼差しは、常に木乃香へと向いていた。

友達このかがいて、外で遊べるだけの体があつて、みんなから慕われている自身の姉。それと比べると、遙には劣等感コンプレックスしか生まれなかった。

外に出る事さえ気を付けなければならず、友人と呼べる存在など一人もおらず、唯一人、自分の部屋で本を読んだり音楽を聞いたり。

小学校へ上がった後も休む事は多く、仲の良い、気の許せる友人など居ないと言つてもいいほどだった。

そして、中学校に上がり、漸く遙にとっての転機を迎えた。

麻帆良学園都市。そう呼ばれる都市がある。

遙は其処の生徒として、中学二年の時期に転校する事になった。元より友人など少ない身。誰も転校する事を悲しむ事などしなかつ

た。

そして今、遙は麻帆良学園学園長、近衛近右衛門 即ち、自身の祖父と対面している。

「お久しぶりです。御爺様」

「うむ。久しいのう、遙。前にあったのは何時じゃったか」

「さあ。私は大抵床に伏せてますから、会う事など殆ど無かったでしょう?」

「そうじゃのう。ところで、木乃香には会わんでいいののか?」

近右衛門は、顎髭を撫でながらそんな事を言う。

「……姉様には、会いません。会う必要も無いでしょう? あまりに久しぶり過ぎて、私の顔を忘れてるかも知れませんね」

例え木乃香が忘れても、遙は木乃香の顔を忘れはしないだろう。

常に羨望の、願望の、嫉妬の対象だった姉。その顔など、忘れはしない。

「そんな事は無いじゃろうて。あった時にきつと驚くぞい」

「そうですね。きつと驚くでしょう」

常に冷静に、冷淡とも取れる口調で話し続ける。近右衛門は違和感に気付かず、高畑に案内するように告げ、遙は高畑の後ろを着い

て行く。

クラスの前まで来て、扉に黒板消しが挟めてあるのが見えた。いつもの事だともいう様に、高畑はそれを取り除き、後から来る遥の為にトランプ全てを解除する。

その後ろを悠然と歩く遥。にわかになぞわつき始める教室。

「はい静かに。今日から一緒に勉強する近衛遥君だ。仲良くしてあげて欲しい」

「近衛遥です。どうぞよろしくお願いします」

小さくお辞儀をして、直ぐに顔を上げる。パパラッチ事朝倉からの質問などに答え終わり、席へと向かう。

隣にはエヴァンジェリンという金髪の少女。表面上でも仲良くしておこうと、仮面の様な笑顔を向ける遥。

「よろしくお願いしますね、エヴァンジェリンさん」

「……ああ、よろしく」

奇妙なモノでも見る目でエヴァンジェリンに観察されながら授業

を受け、その日の授業は終わった。

誰かにつけられている。ある程度の武術の心得があり、尚且つ、相手が素人だと決めつけているのか、追跡の仕方が杜撰なのだ。

確かに一般人にはバレ無い程度の追跡者ではあるが、プロでは無い。角を曲がり、身を隠す。

相手が曲がり角を同じ様に曲がろうとした所で、左手を捻って組み伏せた。

地面に押さえつけられ、右腕は足で、左腕は腕で固定された相手は驚きの表情を浮かべたままこちらを見る。

「おや、これはこれは……確か、桜咲さん、でしたか。ストーカーとは随分と趣味が悪いですね。犯罪ですよ？」

相手がクラスメイトとはいえ、背中にある袋の中身が刀だと分かるな否や、拘束を続ける。

組み伏せられたままの桜咲は、焦った様に何か言い始めた。

「い、いえ。これは断じてストーカーなどでは……」

「言い訳は良いんですよ。というか、どうせ御爺様が御父様の差し金でしょう。護衛なんて意味無いと思っただんですけどね」

溜息でも着きそうな顔で、遙はそう言う。

「だって、そうでしょう？ あなたみたいに、私よりも弱い人が護衛をしたって一緒ですし。護衛が護衛対象より弱いんじゃない、話にすらなりませんよ」

冷めきつた目。恐らく、遙は誰が相手でも同じ事を言っただろう。護衛など必要ない、と。

独りである事に慣れ過ぎた遙は、他人を拒絶する事に拒否感が無い。むしろ、誰かと一緒である方が違和感を覚えるほどになってしまった。

渴望していた筈の、人とのつながりを、いとも簡単に断ち切ってしまう。

「だからあなたは、精々あの何も知らないでこのうとうと楽しい日常を送ってる姉様を護衛してればいいんですよ。私になんて構わずに、ね」

拘束を解き、遙はまた歩き始める。しっかりとした歩調で、孤独感を誤魔化しながら。

「桜通りの吸血鬼。確かに私には関係ないと思っていたんですけどね」

吸血鬼と名乗る少女。それを相手にしても、遙に何ら動じる様子は無かった。

むしろ、これほど自然体でいる遙に、エヴァンジェリンの方が違和感を覚えるほどだ。異質さは群を抜いている。

「……お前は、何者だ？」

「近衛遙、と最初に会った時に言った筈ですが。エヴァンジェリンさん」

「そんな事を聞いている訳ではない。何故、この状況でこれほど自然体でいられる？」

普通ならば。殺気にあてられた恐怖で泣き喚いてもおかしくない。現実を否定する様な言葉を言ってもおかしくない。逃げ出そうとしてもおかしくない。

なのに、目の前の少女は、極普通の事のように反応し、対応し、照応し、感応した。

現実として受け入れ、本当の事と認め、死ぬ可能性があると思ってもなお、遙の表情は揺らがなかった。

「そんなのは別に大した事じゃないですよ。死ぬような病気に今ま

で何度かかったと思ってるんですか？ 死ぬかもしれない恐怖なんて、とつくの昔に薄れて消えましたよ」

エヴァンジェリンが感じた違和感。死を当然のごとく甘受し、反抗する事無く受け入れる。だからこそ、近衛遥は異端なのだ。

修学旅行。まさかここまで波乱に満ちたものになるなどとは思っていなかった。

精々が行動した過激派が本山の術者にやられて終わるものだと思っていたが、本山は随分と役に立たないらしい。遥はそう判断した。

遥のもつ魔力量は、およそ木乃香の半分に満たない程度。病弱で倒れる可能性が高い上に、木乃香の半分に満たない程度の魔力量では、狙ってもうまみは少ない。

ゆえに、三日目の現在まで遥が襲われる事は無かった。

「……君が、関西のもう一人の姫君かい？」

「一緒くたにされるのは好みませんが、まあそうですね。近衛木乃香の妹、近衛遥です。以後お見知り置きを」

「フェイト・アーウェルンクス。名乗られたら名乗り返すのが主義

だからね」

「それはごく丁寧に」

一拍置き、フェイトが口を開く。

「さて、僕と一緒に来てもらえるかな？ 出来れば一緒に来てもらえる」と面倒がなくて楽なんだけど」

「構いませんよ。元より逆らったところでどうにか出来るとも思えませんし」

あっさりとなつその言葉に、フェイトでさえ驚きを隠しきれない。逆らう事さえしない。そのスタンスに、奇妙な感覚さえ覚える。

水を使った“扉”の魔法で移動し、木乃香も攫って来たフェイト。千草達の所まで行き、二人を連れて祭壇へと向かう。

その途中、追いかけてきた桜咲とネギ。

「遥お嬢様！ 今助けて」

「必要ありませんよ。第一、あなた私よりも弱いでしょう？ 居た所で足手まといが増えるだけです。来ないでください」

冷やかに、そう告げる。その冷淡な言葉は、利がある筈の千草でさえ動揺してしまう程の言葉。

一緒にいる月詠は、桜咲より強いと言う言葉を聞いて、本当かと尋ねる。

「本当ですよ。大抵の神鳴流剣士なら相手にさえなりませんね」

それが虚言では無く、本当の事であると分かるのは、もっと先の話だ。

「ほう、あなたが悪魔ですか。爵位級の悪魔と言つと、結構な強さの様ですね」

「君は……確か、近衛遙、だったか。何か用かね？」

「それはこつちの台詞ですよ。女子寮にあなたみたいなのが居る時点で、既に不信感は振り切れてますし」

それでもなお、興味は薄い様だった。

「私としても無視したかった所ですが、生憎と、至極残念ながら貴方の視界の範囲に入ってしまった様なので」

「ふむ。雇い主の言った通り、君は不思議な人物だね。人間でありながら、悪魔だと分かっている私に動揺さえしない」

爵位級の悪魔　ヘルマンは、面白い物を見つけた子供の様に、顔を綻ばせる。

麻帆良祭。その最終日には、未来人である超鈴音が、とある計画を企てていた。

「世界に対しての強制認識魔法、ですか。魔法を世界にばらして救える危機を救う。まるでお伽話の正義の味方の様な話ですね」

夜の闇の中で、遙は空中を歩き、超の居る飛行船へと歩み続ける。

「あなたは、一体何なんだ？」

「おや、麻帆良の最高頭脳とも呼ばれる貴女が私の名前をど忘れですか。まあ、偶にはそういう事もありますよね」

「そんな事は聞いていない！ 貴女は、何者だと聞いていれ！」

「何者、なんて事、どうしてみんな聞くんでしょうね。不思議ですよ、本当。私は、唯の人間ですよ？ 弱くてちつぽけで、欲しい物があつた筈なのに、それさえ忘れてしまった、人形の様な人間」

自重する様な笑みを浮かべて、遙は飛行船へと降り立つ。

魔法世界、墓守人の宮殿。

ネギとフェイトの最終決戦が行われようとしているその近くで、もう一つの決戦が起こっていた。

「 遙」

「おや、姉様。どうしました？ 何か忘れ物でもしましたか？」

いつも通り、昔から何一つ変わらない仮面の様な笑顔。それを見る度、木乃香は胸が締め付けられる様だった。

「 遙。正直に答えて。 遙は、ウチが嫌いなん？」

「 え？ 今更気付いたんですか？」

拍子抜けするほどあっさりと。否定したくなるほどハッキリと、遙は言った。

「昔から、姉様に対する態度で気付かれてもおかしくないと思ってたんですけどね。今の今まで気付かないなんて、呆れを通り越して笑うしかありませんよ」

嘲笑するかのように、遙は笑みを浮かべた。

隣にいる桜咲は、木乃香こそが主だと思っていて、遙はもう、使えるべき主君などとは認識していない。

「昔から、昔からですよ。いつも一人で、おとなしくしているしかなかった私に対して、楽しそうに遊んだ事を御父様に告げる姉様。私は、それを見て、いつも、常に、絶えず、日頃から　貴女が、羨ましかった。『友達』と遊ぶ姉様が。外で遊ぶ木乃香が。楽しそうに笑う貴女が。人の中心でいられるお前が」

私の憧れであり、羨望の対象であり、渴望の象徴だった。

「今私は、この世界を閉じようとするフェイトを手伝っている。私もそこへ行きたい。体の事など考えず、いつでも走り回って遊びたかった。友達と一緒に居たかった。誰かと笑いあって居たかった。人の中心でありたかった」

それを語る遙は、幼い子供の様に希望に満ち溢れ、其処へ希望を託している様にも思えた。

木乃香は、言葉を失っていた。桜咲でさえ、遙から感じる異質さには、背筋が凍るような気分になった。

遙は、だからこそ、と続ける。

「何故、邪魔をする？　お前には関係ないだろう？　私が何をしよう、私の勝手だ。今の今まで目を背けてきた癖に、今更普通の姉の様に私に接しようとするなよ」

雰囲気が一変した。

完全なる敵意。殺意にさえ思える程苛烈で過激な敵意が、木乃香と桜咲を射抜く。

「……関係無い訳や無い。遙は、ウチらで止める。なあ、せつちやん」

「もちろんです。お嬢様」

二人は信じ合っているのだろう。迷い無く、そう答えた。

「遙が悪い事しようとしてるんなら、ウチが止める。世界を封じさせるなんて事はさせへん」

桜咲は刀を抜く。木乃香の、遙の父から受け継いだ刀“夕凧”を。

「……どうあっても敵対するか。構わない。私も、言いたい事を言わせてもらおうし、全力でやる」

刀を抜く。取り分けて名刀と言う訳ではない。だが、十分に業物の域に入る刀だ。

木乃香達の眼は、遙を可哀想とでも思っている目だ。悲しそうで、哀しそうな、憐れみを含んだ眼。

「……そんな目で、私を見るな！　いつも私を見下して……私に無い物を、お前は全て持っているじゃないか！！　私が欲しい物を、全て手に入れているじゃないか！！　これ以上私から、何を奪うつて言うんだ！！！」

近衛遙の、最初で最後の全力の戦闘が、今　幕を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2232z/>

渴望の先にあるモノ

2011年12月8日01時00分発行